

非言語的コミュニケーションに及ぼす特性不安の影響 —非言語的コミュニケーション成立の妨害に関する3つの仮説の検討—

The Effects of Trait Anxiety on Nonverbal Communications: An investigation
of 3 hypotheses on interrupting nonverbal communications.

三 輪 寿 二

根 本 橘 夫

(東京足立病院心理福祉課) (千葉大学教育学部)

Syuji Miwa

Kitsuo Nemoto

問題と目的

非言語的コミュニケーションの位置づけ コミュニケーションは、その手段によって、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションに大別される。非言語的コミュニケーションとは言語以外の手段によるコミュニケーションとされるが、これは除外規定である。したがって、言語的という言葉が言語内容という意味に限定すれば、非言語的コミュニケーションは、表情・しぐさ（ジェスチャー）・姿勢といった視覚的手段、抑揚・声の調子・アクセントといった聴覚的手段、さらに、対人距離や接触を含む。しかし、言語的という言葉が音声的要素全てを含むとすれば、聴覚的手段は非言語的コミュニケーションには含まれなくなる。本研究においては、聴覚的手段を含めた前者の意味で、非言語的コミュニケーションを捉えておく。

ところで、我々の生活のなかで感情生活の果たす役割は大きい。感情のコミュニケーションの阻害が、いろいろな心理的問題・対人的問題・社会的問題に発展することも多い。この重要な役割をもつ感情のコミュニケーションはどのようになされるのか。

過去の研究によれば、非言語的手段は、感情・態度・地位・パーソナリティなどを伝えるとされるが、そのうち、感情のコミュニケーションでは、非言語的手段が言語的手段より優位な手がかりになるという研究報告がある (Ekman, P. & Friesen, W. V. 1972; Friedman, H. S. 1979他)。それらの研究では主に表情が対象となっている。また、精神分析家のDeutsch, F.

(1952) は、自由連想中の患者の姿勢や身体動作が、患者の心理力動や無意識の感情の理解に重要な情報を与えることを主張し、多くの例をあげている。これらは、感情領域のコミュニケーションにおける非言語的手段の重要性を示しており、したがって、その機能の仕方が感情のコミュニケーションに大きな影響を与えられられる。

そこで、本研究では、表情とジェスチャー（以下、ジェスチャーを表情以外の上半身の動作を指す動作とし、“身体動作”とよぶ）による感情の非言語的コミュニケーションを検討する。

不安と非言語的コミュニケーションについての研究概観 コミュニケーションは、何らかの情報を伝え、受けとり、相互理解をする過程であり、そこには、情報を伝える送り手（以下、表出者と記す）と情報を受けとる受け手（以下、認知者と記す）が存在する。したがってコミュニケーションのあり方に、表出者および認知者のパーソナリティが、何らかの影響を与えることが予想される。

本研究では、感情のコミュニケーションに影響を与えるパーソナリティ要因として不安を取りあげ、表出者・認知者の不安のコミュニケーションへの影響を検討する。

不安や緊張の高まる場面で、表情が硬張ったり、動作がぎこちなくなったり、あるいは、身動きがとれなくなったりすることは、我々の経験するところである。また、そのような場面では、他人の話聞きもらしたり、普段理解できることが理解できなかつたり、相手の様子に目が行き届かなかつたりする。これらのことは、不安がコミュニケーションに阻害的に作用することを示している。したがって、パーソナリティ要因としての不安、すなわち特性不安もまた、表情や身体動作による感情のコミュニケーションに影響を及ぼすことは容易に想像できるだろう。

特性不安が感情の非言語的コミュニケーションに及ぼす影響は、表出者の不安による影響と認知者の不安による影響に分けられるので、それぞれについて、表情と身体動作を中心にこれまでの所説や研究を概観する。

Cameron, N. (1947) によれば、慢性的不安反応の特徴は、常に高まった骨格および内臓の緊張が存在することとされる。その緊張は、個人の習慣的リズムを妨げ、比較的わずかな刺激に対しても誇張した不適切な反応を起こさせると考えられている。Cameronは、この緊張の結果として歩行・表情・言語反応などの運動に堅さが示されること、指・舌のふるえが起こるなどを挙げている。さらに、高不安者の行動は、その直面している事態に対するものというより、自分の不安や緊張に対してなされると述べられている。Cameronの述べることにしたがえば、高不安者は、自分の不安や緊張を解消するための行動を起こすと考えられる。この点と関連して、不安と表出者の非言語的表出（以下、非言語的表出行動とよぶ）との関係についての研究をみると、適切な非言語的表出行動の促進・阻害、不安の表現としての非言語的表出行動（以下、不安の非言語的指標とよぶ）についての研究が多くなされている。

多くの研究者は、不安の非言語的指標として、self-touchを挙げている。この動作は、自己による自己の身体への接触動作で、手で身体の一部を触ったり、両足を擦り合わせたりする動作である。self-touchは、body-focussed (Freedman, N. & Hoffman, S. P. 1967) とよばれる。また、extremity movementsと記述されてきた“腕を振り回す”“胴を揺らす”といった無目的で反復的な非接触動作も、不安の非言語的指標とされている。self-touchとextremity movementsは、self-manipulation (Rosenfeld, H. M. 1966), autistic (Mahl, G. F. 1968), nonsignaling gesture (Waxer, P. H. 1977) などとよばれる。Boice, R. & Monti, P. M. (1982) は、不安とextremity movementsの間に $r=0.75$ の相関関係を、また、不安とself-manipulationとの間にも $r=0.85$ という高い相関関係をみいだしている。研究者の一致した見解では、これらの動作にはコミュニケーションの機能はない、とされる。例えば、Freedman & Hoffman (1967) は、身体動作をbody-focussedとobject-focussedに大別し、前者を内面過程へのとらわれの反映であり、非伝達的で無意味な動作であると解釈した。それに対して、後者を伝達的で会話に関連した有意義な動作であると解釈した。self-manipulationやself-touchには、自己刺激による不安・緊張の解消、調節機能があるとされている (Freedman & Hoffman 1967; Morris, D. 1977; Ruggieri, V. et. al. 1982他)。したがって、不安の非言語的指標の研究は、Cameronの説明を支持すると考えられるが非伝達的な無意味な動作が、感情のコミュニケーションにいかなる影響を及ぼすかについては明らかではない。しかし、self-touchに代表される身体動作は伝達される感情とは無関係な、不安解消のための身体動作であるので、コミュニケーションを促進するとは予想しがたい。

不安を直接に扱ったものではないが、Cunningham, M. R. は、Eysenck Personality Inventory の神経症傾向 (neuroticism) と身体動作による感情伝達との間に負の相関関係の傾向差 ($r = -0.24$) をみだし、表情による伝達との間にも、有意差はないが、負の相関係数 ($r = -0.17$) をみだしている (1977)。すなわち、神経症傾向を示す者は、表情や身体動作による感情表出が判断されにくいことが示唆される。

莊巖は、音声による感情伝達への特性不安の影響を、5 個の感情について検討した。その結果、高不安者は低不安者に比べ、感情が全体的に正しく判断されにくいこと、特に、愛情・怒りの伝達が判断されにくいことを確かめている (1975)。

次に、非言語的手段による感情認知に及ぼす不安の影響についての諸研究をみると、Sarason, I. (1960) は、高不安者は、課題より自分の不安に関心が集中するため、低不安者に比べ成績が低くなると結論している。不安は課題達成に妨害的に作用するという、不安の妨害説である。

Wine, J. によれば、Sarason の所説は、課題が評価的あるいは自我脅威的である場合に関して妥当であるとされ、課題がそういう性質でない場合には、高不安者の方がむしろ成績が良いと報告している (1971)。この点について、心理学専攻学生と経済学専攻学生を被験者とし、表情認知を課題とした Gard 他研究があり、その結果、経済学専攻学生についてのみ、Wine の主張が支持された (Gard, K. A., Gard, G. C., Dossett, D. & Turone, R. 1982)。この結果は、課題達成への影響を特性不安のみで結論づけられないことを示すものと、Gard 等は解釈している。しかし、これは、特性不安の妨害的影響と矛盾するものではない。

前出の Cunningham によれば、神経症傾向と表情認知および身体動作の認知の正確さとの間に、いずれも正の相関関係がみだされている (それぞれ $r = 0.32, r = 0.23$; 1977)。Cunningham は、この結果について、対人的問題や感情的問題をもつ者は、表情や身体動作による感情認知の正確度が高くなると結論している (1977)。神経症傾向の者の結果を特性不安に適用することには問題があるが、特性不安と対人的問題や感情的問題は関係があると考えられ、この解釈は、高不安者の認知の正確度の問題について示唆的である。

直接に不安を扱ってはいないが、表情による感情認知の問題について Toner, H. L. & Gates, G. R. (1985) は、“perceptual set” という考えを提出している。これは、認知者の感情状態によって引き起こされる特定の感情認知への構えである。これによれば、認知は特定の感情についてはその正確度が高まるが、同時に、特定の方向への誤解が生じると考えられる。この研究から、Toner 等は、不安の高い女性は悲しみを認知しやすい傾向があることを示唆している。

以上、感情のコミュニケーションのうち、感情の種類 (質) について述べてきたが、感情には、もうひとつ強度 (量) という要素がある。感情の強度の認知について、Schiftenbauer, A. は、感情の種類に関係なく何らかの感情が喚起されていると、感情認知の際、その感情の強度を強く認知することを確認している (1974)。とすれば、不安が高ければ、感情の強度を強く認知すると予測される。

諸研究を概観してきたが、不安の非言語的コミュニケーションへの影響についての研究の数は豊富とはいえないし、さらに、研究者の見解や結果も一貫していない。

本研究の仮説と構成 前節で述べたように、不安の非言語的コミュニケーションへの影響はこれまでのところ、明確とはいえない。そこで、本研究における第 1 の問題は、特性不安が感情の非言語的コミュニケーションの成立にいかなる影響を及ぼすかを検討することである (以下、表出者が表出した感情と認知者が認知した感情の一致をコミュニケーションの成立とよぶ)。

前節より、特性不安は、表情や身体動作による感情表出に阻害的影響を及ぼすことが予想されるが、その理由や内容については明確でない。この阻害的影響については、3つの説明が考えられる。まず、自己提示理論による説明である。自己提示理論によれば、高不安者は、自分の社会的イメージを悪くするような社会的損失を最小限にとどめるために、抑制的で受動的な態度を選択するとされる (Leary, M. R. 1985)。具体的には、寡黙になったり、自分への注意をそらすために、質問行動が増大する (Leary, Knight, P. D. & Johnson, K. A. 1986)。これにしたがえば、自己表出に対して引きこもり、表情表出、身体動作はともに抑制され、その結果、認知者に正しく判断されなくなると考えられる。これを引きこもり仮説とよんでおく。これを認知者側に適用すれば、高不安者は、他者の様子に敏感になり、他者を観察し、注意を集中するであろう。その結果、認知の正確度は増大すると考えられる。

第2の説明は、前節で論じた Sarason の妨害説の適用である。高不安者は、その不安のために、自分の不安・緊張への注意が高まり、その解消に多くの労力を費やす。Cameron の説明のように、高不安者は自分の不安に対して行動をとる。表情表出は不安解消の影響で歪みが生じ、身体動作では、不安解消のための無意味な動作が増大するだろう。その結果、表出感情が判断されにくくなる。これを解消仮説とよんでおく。他方、認知者への影響は既に論じたように、課題への集中力を欠き、認知の正確度は低くなると考えられる。

不安の感情表出への阻害的影響が、引きこもり仮説を支持するのか、あるいは解消仮説を支持するかを予想するために、コミュニケーションの成立を検討する実験2の前に、表出者に焦点を当て、実験1として予め検討する。

過去の諸研究は、主にコミュニケーションの成立に焦点を合わせてきた。しかし、それは、表出能力や認知能力の有無の評価でしかなく、高不安者の自己理解、そして、高不安者についての理解を深めることにはならない。そこで、パーソナリティ要因としての不安による表出傾向・認知傾向を明確にすることが、本研究の第2の問題となる。perceptual setを表出者にも適用すれば、特性不安は、表出や認知に一定の傾向を与えられと考えられる。表出傾向とは、表出が特定の方向で判断される傾向である。Ekman (1965) は、身体は感情の強度を表現すると主張しており、そうならば、不安の非言語的指標である self-manipulation などの無意味な身体動作も感情のコミュニケーションに、何らかの影響を及ぼすことも考えられる。また、認知傾向は、表出を特定の方向で認知する傾向である。不安がコミュニケーションの不成立に、どのような方向性を与えているかを検討することで、これらの表出傾向や認知傾向は、最も明らかにされるだろう。

そして、この表出傾向、認知傾向という考えが、阻害的影響の第3の説明を与える。もしこれらの傾向があるならば、不安は特定の感情のコミュニケーションの成立を促進すると考えられるが、全体的にはその成立が阻害されと考えられるからである。この表出傾向、認知傾向は、実験2で検討される。しかし、これらの傾向の探求は、いくつかの感情を全体的に扱うだけでなく、感情別に検討することを必要とする。本研究では、喜び・悲しみ・嫌悪・怒り・驚きの5個の感情をとりあげ、感情別および感情全体の両方から検討をくわえる。

これらの傾向は、コミュニケーションの不成立の場合だけでなく、コミュニケーションが成立する場合においても、何らかの微妙な影響を与えられと考えられる。すなわち、高不安者と低不安者が、ともに正しく感情を認知されても、認知者に与えるイメージに微妙な違いがあると考えられる。同様に、認知者において、表出された感情を正しく認知していても、認知者の特性により微妙な認知の相違が生じると考えられる。特性不安による表出者の与えるイメージの差異、認知者がいかにイメージの差異について、SD法を用いて検討する。

さらに、感情の強度のコミュニケーションを検討することは、本研究における、上述の2つの問題を考察する材料となるであろう。これについては、前節で述べたように、不安の高い認知者が感情の強度を強く認知すると考えられるが、上述のように、表出傾向の影響がみられることも考えられる。

本研究では、不安が非言語的コミュニケーションに及ぼす影響を、2つの実験により検討する。特性不安を測定するために、顕在性不安検査（三京房刊 以下MA Sと略記）を使用する。

まず、実験1で、表出者の問題をとりあげる。表出者はMA Sにより高不安表出群と低不安表出群の2群にわけられ、これら2群が表出群を構成する。表出群は、5個の感情の体験談をするよう求められる。この表出群の結果から、引きこもり仮説と解消仮説について、身体動作と発言行動をとりあげて検討する。また、あわせて、高不安者の身体動作の特徴も明らかにする。この身体動作の特徴は、特性不安者の表出傾向に示唆を与えられと考えられるためである。

次に、実験2では、認知群を構成する。認知群はMA Sにより、高不安認知群、中不安認知群、低不安認知群の3群に分けられる。実験2では、これら3つの認知群被験者は、表情と身体動作に関する感情認知課題を与えられる（この課題は、表出群の非言語的表出行動のビデオである）。この課題への回答から、主に第3の仮説について検討をくわえる。

実 験 1

目 的

実験1では、表出者の特性不安の問題を検討する。すなわち、不安の非言語的表出行動への影響について検討する。実験1における非言語的表出行動は、身体動作と発言量を対象とするが、そのうち、身体動作を中心に検討する。

身体動作は、有意味な動作と無意味な動作に分けられる。有意味な動作は伝達的で、コミュニケーションに寄与するが、無意味な身体動作はself-touchに代表されるように、非伝達的でコミュニケーションとは無関係な動作である。引きこもり仮説が支持されるならば、高不安者の無意味な身体動作は抑制されるだろう。なぜなら、無意味な身体動作は、他者に否定的な印象を与え、自分の社会的イメージを悪いものとすると考えられるためである。逆に、解消仮説が支持されるならば、高不安者の無意味な身体動作は、不安の解消手段として、促進されるだろう。

有意味な身体動作は、解消仮説にしたがえば、抑制される。高不安者は、自分の不安に対処することに関心を奪われるためである。引きこもり仮説では、いずれとも決定しがたい。したがって、高不安者の有意味な身体動作が促進されるならば、引きこもり仮説が支持される。

発言行動は、引きこもり仮説にしたがえば、高不安者は自分への注意をできるだけそらそうと努力するため、発言時間を短くすると考えられる。解消仮説ではいずれとも決定できない。したがって、高不安者の発言量が低不安者より多いならば、解消仮説が支持される。

また、実験1では、引きこもり仮説と解消仮説についての示唆を得るだけでなく、高不安者の身体動作の特徴についても検討する。もし、解消仮説が支持されるなら、無意味な身体動作が促進されるだけでなく、有意味な身体動作が抑制されと考えられ、さらに、表出傾向についての示唆を得るためである。

したがって、実験1では、次の2点をとりあげる。

- (1) 不安の影響が、引きこもり仮説と解消仮説のいずれを支持するかを検討すること。
- (2) 高不安者の非言語的表出行動の特徴を明らかにすること。

解消仮説が支持されるならば、高不安者は低不安者に比べ、無意味な身体動作が促進され、有意義な身体動作が抑制される。

方 法

被験者：千葉大学教育学部2年生250名にMA Sを実施した。人数が少なく、実験協力を得にくかった男子学生が除かれた。女子学生192名のうち、無応答10点以上の者、および、嘘構点6点以上の者を除いて、最終的に、女子学生114名が対象とされた ($M=21.07, SD=6.38$)。この中から、高不安表出者群8名 ($M=33.5, SD=3.32$: MA S得点29点以上の者)、低不安表出者群8名 ($M=10.0, SD=1.66$: MA S得点12点以下の者)の合計16名を被験者とした。

手続き：16名の被験者は、うれしかったこと(喜び)・悲しかったこと(悲しみ)・腹がたったこと(怒り)・いやだったこと(嫌悪)・驚いたこと(驚き)の5個の感情を、最も強くいだいた時の体験を話すように、あらかじめ依頼された。体験談の時間制限はないことも被験者に伝えられた。この依頼の際に、体験談の様子をビデオ撮影することについて、被験者の了承を得た。

実験状況では、各被験者は机をはさんで実験者と一対一で対面した。被験者のビデオ撮影のため、実験者が写らないように両者は斜めの位置で向かい合った。被験者が話している様子は、被験者の正面から約2 m離れた位置に置かれたビデオで撮影された。画面は、被験者の上半身のみが写るようにセットされた。

被験者は、5個の体験談の話す順番を指定された。その順番は、高不安群、低不安群の各群で、被験者ごとに一つずつずらされた。被験者は実験者の教示を受けてから、指定された順に、5個の体験談をした。実験者の合図で体験談が始められ、終了は、被験者が示した。体験談中の実験者の応対は、うなづく動作および「うん、うん」という相づちのみであった。また、各体験談間に1～2分程度のインターバルがとられた。

教示は「体験した時のことをよく思い出して、その時の感情を私(実験者)に伝えるつもりで、普段と同じように、自由に話してください」というものであった。

分類：図1は、実験1における非言語的表出行動(発言量と身体動作)の分類を示したものである。身体動作は以下のように分類された。表象(emblems, 以下Eと略)・図解(illustrators, 以下Iと略)・顔面接触動作(facial-touch, 以下FTと略)・顔面以外の身体への接触動作(body-touch, 以下BTと略)・物体接触動作(object-touch, 以下OTと略)・非接触動作(nontouch, 以下NTと略)の6個のカテゴリーが基本的カテゴリーである。

Eとは言語の直接的な代理となる動作であり、Vサインで勝利を表現したり、首を縦にふることでYESを、横にふればNOを示すといった動作である。Iは会話に直接結びついた動作で、会話内容を精緻にしたり、明確にしたりする身体動作である。(Ekman & Friesen 1969, 1980)。例えば、指先をくねらせながら落下曲線を描いて、物体落下の軌道のゆれ具合を示し、落下の様子を精緻にしたり、手を向かい合わせて開くことで、距離や程度の大小を示したりするという動作である。したがってIとEは言語の代理、補完機能をもつ動作であり、いずれも有意義な身体動作である。以後、IとEの2つのカテゴリーをまとめて“有意義動作”と一括する。

FT, BT, OTはいずれも、手による接触動作で、接触対象によって、さらに下位分類された。ETは顔面各部への接触(髪・額・まゆ毛・目・鼻・頬・唇・顎の下位8項目)、BTは顔面以外の上半身各部への接触(首・肩・指・手・腕・腕組み・服の下位6項目)、OTは身体以外の物体への接触(机・椅子の下位2項目)である。これら3つのカテゴリーをまとめて、接触動作

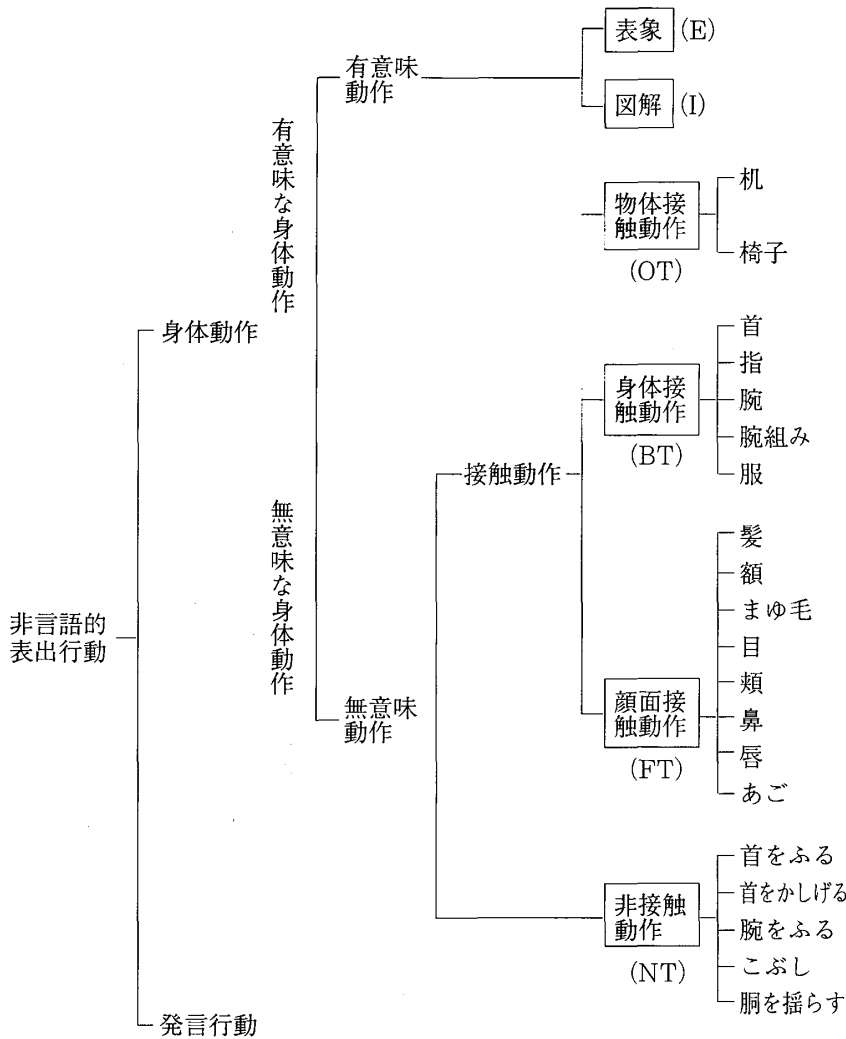


図1 非言語的表出行動の分類カテゴリー

と一括する。OTを除いた3つの接触動作はself-touchに該当する。NTは接触を伴わない動作で、首をかしげる・首をふる・腕をふる・胸を揺らす・こぶしを作る、の下位5項目をもつ。

接触動作と非接触動作は、ともに言語内容とは無関係な動作と判断される身体動作であり、これをまとめて“無意味動作”と一括する。これが、前章の autistic, self-manipulation 等に該当する。

本研究では、身体動作について、6個の基本的カテゴリーの他に、有意意味動作(I+E)・接触動作(FT+B T+OT)・無意味動作(FT+BT+OT+NT)・身体動作全体(I+E+FT+BT+OT+NT)の4個を加えて、計10個の指標について検討する。

測度：身体動作の時間比率

(行動時間／発言時間：動作の使用時間をカウントし、それを発言時間で割った百分率)・頻度(1分あたりの回数：動作の回数をカウントし、それを1分あたりの回数に変換した数値)、発言量(秒)の3つの測度である。

分析方法：2人の評定者(心理学専攻の大学院生と実験者)が撮影されたビデオを見て評定した。行動分類の決定および動作開始・終了の決定は、2人の話し合いによってなされた。時間計測はストップウォッチでなされ、回数が数えられた。また、異なる行動が同時に観察された場合、別々に各該当カテゴリーに分類し、計測値をカウントした(例えば、身体を揺らしながら両手をこすり合わせる行動が、それぞれ8秒と5秒続いたならば、“胸を揺らす”項目に回数-1・時間-8，“手への接触動作”項目に回数-1・時間-5とカウントした)。

結果

検定には、Uテストが用いられた。同順位の場合は平均順位を計算した。Uテストで有意差あるいは傾向差が生じた場合、さらにCR値を求めた。ただし、同順位が両群にまたがる時は、修正式でCR値を求めた。

各測度は、感情の6個の各次元について処理された。

身体動作の時間比率：表1は、身体動作の時間比率において有意差の得られた条件をまとめたものである。感情全体において高不安者は低不安者より、NTの時間比率が有意に高い(U=

11, CR=2.21; $P<.05$)。怒りでは、高不安者は低不安者より、無意味動作の時間比率が高い傾向があり ($U=15$, CR=1.79; $P<0.08$)、その4個のカテゴリーのうちBTの時間比率に同じ傾向がみられた ($U=14.5$, CR=1.78; $P<0.08$)。悲しみにおいて、低不安者は高不安者より、Iの時間比率が高い傾向がある ($U=49$, CR=1.81; $P<0.08$)。

表1 身体動作の時間比率に有意差の得られた条件

感情		悲しみ	怒り		感情全体
カテゴリー		図解	接触動作(身体)	接触+非接触	非接触動作
不安	H	2.83	21.28	29.37	16.50
	L	18.71	15.06	27.40	2.26

身体的動作の頻度：表2は、感情の6個の各次元における身体動作の頻度に有意差の得られた条件をまとめたものである。怒りにおいて、低不安者は高不安者より、有意味動作の頻度が多い傾向があり ($U=49$, CR=1.79; $P<0.08$)、その2個のカテゴリーのうち、Eの頻度に同じ傾向がみられた ($U=50$, CR=1.94; $P<0.06$)。悲しみにおいて、低不安者は高不安者より、無意味動作の頻度が有意に多く ($U=58$, CR=2.73; $P<0.01$)、さらに身体動作全体でも、低不安者は高不安者より、頻度が有意に多いことがわかった ($U=57$, CR=2.63; $P<0.01$)。

表2 身体動作の頻度に有意差の得られた条件

感情		悲しみ		怒り	
カテゴリー		接触+非接触	動作合計	表象	表象+図解
不安	H	1.86	3.07	0.33	2.28
	L	3.16	6.56	1.04	3.59

発言量：嫌悪において、高不安者(171.3秒)は低不安者(82.0秒)より、発言が有意に長いことがわかった ($U=52$, CR=2.10; $P<0.05$)。その他については、有意差、傾向差ともにみられなかった。

考 察

NTは無意味な身体動作であるから、感情全体の結果から、一般に高不安者が無意味な身体動作の使用時間が長いことがわかる。これは、解消仮説を支持する。

無意味な身体動作を感情別に検討すると、怒りにおいて、高不安者の無意味な身体動作(無意味動作とBT)の使用時間が長いことが示唆されたが、悲しみでは、高不安者の無意味動作の頻度が少ないことが示されており、いずれの仮説とも決定しがたい。むしろ、感情ごとに不安の影響が異なり、怒りでは、解消仮説の支持が示唆され、悲しみでは、引きこもり仮説が支持されると考えられる。

有意味な身体動作については、怒りと悲しみで、高不安者の抑制が示唆された。したがって、高不安者の有意味な身体動作は抑制されることが示唆されるが、これは、2つの仮説の判断基準にはならない。

嫌悪における発言量の結果は、不安が発言行動を促進することを示している。Murray, D. C. (1971)は不安と発言行動の関係についての諸研究を概観し、不安と言語的生産性については逆U字型の曲線関係が多く報告されているとしているが、彼はその両者に正の相関関係をみだしている。しかし、特性不安と言語的活動性にU字型の曲線関係を示す報告もあり(Saunders, T. R. Jr. 1974)、研究者間の一致をみていない。発言量の結果は、嫌悪で、解消仮説が支持

され、これは、発言行動自体に不安解消の作用があることを示唆する。また、有意差はみられなかったが、悲しみと怒りでも高不安者の発言量は低不安者より多く、逆に、喜びで少ない。すなわち、否定的な感情の体験談では、高不安者の発言量が多くなる。これは、否定的な感情の体験談が、高不安者のストレスを高めたためと考えられる。Pope, B. & Siegman, A. W. (1965) は、ストレス話題で、高不安者の言語的生産性が高まり、中性的な話題のもとでは、差がないことを検証している。本実験も、この結果を支持しているが、これは、発言行動の不安解消機能を示している。

身体動作と発言量の結果を総合すると、解消仮説の支持が示唆されることが考えられる。しかし、悲しみにおける無意味な身体動作の頻度についての結果、および喜びと驚きでは、不安の非言語的表出行動への影響がみられなかったことは、感情別に考察する必要があることを示していると考えられる。

怒りでは、高不安者は、有意味な身体動作を抑制し、無意味な身体動作を促進することが示唆された。したがって、解消仮説の支持が示唆される。怒りは、活動水準が高く (Schlosberg, H. 1952)、怒りの体験談は身体活動を喚起しやすいものと考えられ、高不安者の不安や緊張は、無意味な身体動作を通じて解消されたと考えられる。

嫌悪では、不安は、非言語的表出行動（発言行動）を促進する。これは、解消仮説を支持する。嫌悪は怒りと同様、不快な感情であるが、嫌悪では、高不安者の不安・不快が身体動作ではなく、発言行動の促進によって解消されることを示していると考えられる。すなわち、怒りと嫌悪は、不安や緊張の解消をはかる手段が異なると考えられる。

悲しみでは、高不安者は、無意味な身体動作も有意味な身体動作もともに抑制され、さらに、身体動作全体の頻度も抑制された。つまり、悲しみでは、低不安者は高不安者より、無意味な身体動作を頻繁に用い、有意味な身体動作に時間を使うといった具合に、身体動作が変化に富んでいる。いわば、低不安者は、高不安者に比べ、身体的な活動性が促進されるのである。逆に言えば、高不安者の身体動作は全体的に抑制される。そこで、高不安者のみについて、5個の感情の身体動作全体の頻度を検討したところ、有意差はみられなかったが、悲しみでは、他の4個の感情より頻度が少なめである。悲しみの表出が非活動的な状態で表現される感情であることを考えると、高不安者は悲しみの表現に適合的な状態を示していたとも考えられる。また、有意差はなかったが、発言量も高不安者の方が多い。これらを総合すると、不安者は悲しみの感情表現をよく行うという Plutchik の研究結果 (1967) に一致すると考えられる。悲しみの表出は「うなだれる」「肩をおとす」といった動作などで示されるが、これらの動作が項目に含まれていなかったことも、本実験の結果の一因であると考えられる。したがって、悲しみでは、無意味な身体動作の結果からすれば、引きこもり仮説が支持されるが、悲しみ表出への適合性という点から考えると、引きこもり仮説も解消仮説も適合せず、表出傾向との関連性が考えられる。

喜びと驚きでは、引きこもり仮説も解消仮説も支持されなかった。これは、これらの感情表出のもとでは、高不安者が影響を受けないことを示しているとも考えられるが、さらに、実験2の結果を考慮する必要があり、実験2で考察する。

非言語的表出行動に対する不安の影響は、全体的には、解消仮説に支持的ではある。しかし、感情別の考察は、2つの仮説について、いずれとも決定しがたいこと、表出傾向の影響が示唆されることを示しており、さらに、感情別に、不安が与える影響が異なると考えられる。

次に、高不安者の身体動作の特徴について考察する。

感情全体の結果で、不安はNTの使用時間を促進した。そこで、NTの下位5項目を検討した。

その結果, “腕をふる”項目において, 高不安者は低不安者より, その使用時間が長い傾向があることがわかった ($U=15, CR=1.91; P<0.06$)。その他4項目では, 有意差, 傾向差ともにみられなかった。したがって, 高不安者の表出特徴は無目的な非接触動作にあると言える。とくに, 腕を振るという動作が特徴となることが示唆された。ただ, この動作については, 大きな腕の振りというより, 水平的な小さめの腕の振りであった。従来の研究では, 不安と self-touch の関連がとりあげられることが多かったが, 本研究では, 非接触動作が高不安者の特徴として確かめられた。非接触動作は, 既述の extremity movements に該当し, これも過去の研究と一致している。Waxer (1974) は, 不安の非言語的指標として, “無意味な手の動き”が多いことを確かめているが, 本研究の“腕をふる”項目もそのひとつであり, Waxer の見解を支持している。

感情別では, 怒りで, 高不安者の無意味な身体動作の促進(特に, 身体接触)と有意意味な身体動作の抑制が示唆され, 過去の諸研究と一致する点の多いものであった。しかし, 悲しみでは, 高不安者の有意意味な身体動作の抑制は示唆されたが, 無意味な身体動作の抑制が示された。この結果は, 身体動作全体も抑制されることから, 高不安者は悲しみでは, 身体動作の活動性が抑制されるためと解釈される。

実験 2

目的

実験1で, 不安が非言語的表出行動(身体動作と発言量)に及ぼす影響を検討した。その結果, 解消仮説が有力であった。したがって, これを認知群に適用すれば, 課題への集中力が持続せず, 高不安認知者の認知の正確度は劣ると考えられる。

しかし, 実験1の考察で論述したように, 不安は, 感情の種類によって, 与える影響が異なると考えられる。喜びと驚きについては, 不安の影響がみいだされず, 怒りでは解消仮説の支持が示唆され, 嫌悪では解消仮説が有力, 悲しみにおいては, 引きこもり仮説が支持されるが, いずれとも決定しがたく, むしろ, 表出傾向の影響が強いことを示唆していた。したがって, 高不安者の表出傾向・認知傾向という方向から検討する必要があると考えられる。

次に, この実験2では, 実験1の各表出群から4名ずつ計8名を選んで, 新たに表出群(不安高・低2群)を構成した。さらに, 認知群を加え, これを不安の高さによって, 高・中・低の3群に分けた。実験2では, これらの表出群と認知群によってなされる非言語的コミュニケーションに対する不安の影響について検討する。

実験2では, 表出群の非言語的表出行動は, 表情と身体動作である。

実験2では, 次の4点が検討される。

- (1) 不安が高いほど, 表出は誤解されやすくなる。
- (2) 不安が高いほど, 認知の正確さは劣る。
- (3) 高不安者には, 特定の表出傾向と特定の認知傾向がある。
- (4) 高不安認知者は, 感情の強度を強く認知する。

方法

被験者:(1) 表出群: 実験1の16名の表出群被験者のうち, 高不安群からは, M A S 得点の高

い者から4名、低不安群からは、MA S得点の低い者から4名を選んだ。低不安群の選択において、2名決定の後、同点者3名のうちから2名が選ばれることになったが、この際、被験者の頭頂部が画面からはずれることがあった1名を不採用とした。表出群は、高不安表出群4名 ($M=36.0$; $SD=2.74$) と低不安表出群4名 ($M=8.8$; $SD=1.30$) の2群、計8名であった。この8名により作られたビデオは、認知群の刺激となった。

(2) 認知群：千葉大学教育学部2年生の女子学生339名にMA Sを実施した（表出群被験者より1学年下である）。このうち、無応答11点以上の者、および、嘘構点6点以上の者を除いて、184名 ($M=19.48$; $SD=7.01$) を対象とした。この中から、高不安認知群14名 ($M=29.6$; $SD=1.92$ MA S得点28点以上の者)、中不安認知群14名 ($M=19.2$; $SD=0.81$ MA S得点18,19,20点の者)、低不安認知群14名 ($M=9.7$; $SD=2.46$ MA S得点13点以下の者) の3群、計42名が認知群の被験者となった。

手続き：新たに選ばれた8名の表出群のビデオが編集され、認知群の刺激となる認知課題がつくられた。これは、実験1で影響された表出群のビデオである。したがって、刺激総数は40個（表出群被験者8×感情5=40）である。表出者が伝えようとしている感情が最も表出されていると実験者が判断した箇所を含むように、各刺激は編集された。その判断に基づいて、各刺激の長さを10秒として、刺激間の余白は5秒程度にした。時間計測はストップウォッチでなされた。40個の刺激はランダムな順序で並べられ、一本のビデオに編集された。なお、それらの刺激の前に、練習用の刺激が2個挿入された。

実験2では、認知群がこの40個の刺激を見て、実験者が用意した評定用紙の質問に回答した。

認知群被験者は、1～4人で実験に参加した。被験者は、着席後、実験者より評定用紙を配布された。評定用紙は42枚、各用紙は同一内容である。実験者は「これから皆さんにビデオを見て貰います。そのビデオは何人かの女性に、いろいろな感情を抱いた時の体験を話して貰い、その様子を撮影したものです。しかし、ビデオは、音声が消してありますので、皆さんには、画面のみを見て回答して貰うことになります。ビデオは、10秒の長さのものが40個あり、1個見て1枚回答、という形で進めていきます。」と説明し、被験者に評定内容を確認させて、記入方法を説明し、さらに回答上の注意事項の説明をくわえた。その後、被験者は一度の回答練習をして、不明の点を質問してから、実験に取り組んだ。

実験者は、被験者の各刺激への回答が終了したことを確認してから、次のビデオ刺激を被験者に見せた。また、回答が半分（刺激20個分）終了したところで、数分の休憩を入れた。

評定内容：設問は3つである。1番は、表出群被験者が表出した感情の種類とその強度についての質問である。種類は、喜び・悲しみ・嫌悪・怒り・驚きの他に、恐怖・軽蔑・恥を加えた8個の選択肢と“その他”の自由記述から成り、認知群はそこから、1つ選択する。新たに、感情の種類を3個追加したのは、コミュニケーションが不成立の時に、その不成立の方向性を詳しく検討するため、すなわち表出傾向・認知傾向の分析のためである。強度は6段階評定で、強度を表す6つの副詞（強度の弱い方から、“わずかに” “少し” “わりに” “かなり” “とても” “非常に”）から1つを選択するようになっている。2番は、感情判断の理由についての質問であり、自由記述とした。3番は、各刺激に対する認知群被験者の印象についての質問である。7段階の両極性尺度15本（各尺度は“どちらでもない”を中央に各極へ、“少し” “かなり” “非常に” で構成）全てに回答を求めた。これは、不安による表出傾向・認知傾向の微妙な違いを検討するためのものである。15本の尺度は、姿勢の感情的意味次元の研究（工

藤・西川, 1984) で用いられた尺度を中心に選択し, また, 手の動きに含まれる情動情報の研究 (益谷・莊厳, 1989) の感情語, および, 感情表現辞典 (中村, 1979) を参考にして構成された。

回答上の説明は, 2 番については, 具体的に記述すること, 回答は複数でもよいこと, の 2 点である。3 番では, 正答はなく, 回答の一貫性を気にせずに, 感じたままを答えるよう説明した。

結 果

成立率: 表出群が表出した感情と認知群が認知した感情が一致した場合をコミュニケーションの成立とした。コミュニケーションの成立に関し, 5 個の感情別と感情全体の, 6 個の感情の次元について調べた。表出群が表出した感情とそれに対する認知群の評定から, 感情のコミュニケーションの成立・不成立を, 両群の不安別 6 つのペアごとにまとめたものが表 3 である。この表の各数値は, “回答数/56” で計算され, したがって, 各感情の成立率は, “一致数/56” である。さらに, 感情全体の成立率を求め, 感情別および感情全体の成立率について, 表出群要因 2 (不安高・低) × 認知群要因 3 (不安高・中・低) の 2 要因分散分析で処理された (これらの分析では, 成立率は, 角変換された)。その結果, 悲しみと嫌悪において, 表出群要因に有意差がみられた。悲しみでは, 高不安表出群は低不安表出群より, 悲しみ表出を有意に正しく判断されやすいことがわかった ($\chi^2=45.955$, $df=2$: $P<0.001$)。嫌悪では, 低不安表出群は高不安表出群より, 嫌悪表出を有意に正しく判断されることがわかった ($\chi^2=63.266$, $df=2$: $P<0.001$)。感情全体, その他の 3 個の各感情については, 有意差はみいだされなかった。

表 3 表出群と認知群の不安別コミュニケーション成立率

exp		cog	H								M								L									
			J	Sa	D	A	Su	F	Sh	C	他	J	Sa	D	A	Su	F	Sh	C	他	J	Sa	D	A	Su	F	Sh	C
H	J	48.2	16.1	3.6	12.5	3.6	1.8	12.5	1.8	0	53.6	7.1	3.6	5.3	5.3	1.8	16.1	1.8	5.3	41.1	10.7	5.3	7.1	8.9	1.8	16.1	7.1	1.8
	Sa	1.8	42.9	19.6	8.9	0	14.2	10.7	1.8	0	1.8	41.1	12.5	14.2	0	5.3	17.9	5.3	1.8	5.3	44.6	7.1	12.5	0	8.9	10.7	7.1	3.6
	D	14.2	21.4	7.1	17.8	14.2	3.6	14.2	7.1	0	19.6	21.4	3.6	8.9	7.1	7.1	17.9	14.2	0	16.1	26.8	5.3	10.7	16.1	3.6	14.2	5.3	1.8
	A	17.8	19.6	16.1	8.9	7.1	10.7	16.1	0	3.6	21.4	10.7	10.7	12.5	7.1	5.3	28.6	1.8	1.8	16.1	7.1	19.6	14.2	5.3	7.1	17.8	7.1	5.3
	Su	39.3	14.2	3.6	7.1	23.2	1.8	8.9	0	1.8	46.4	16.1	5.3	7.1	16.1	1.8	3.6	3.6	0	39.3	23.2	0	1.8	19.6	1.8	5.3	3.6	5.3
L	J	53.6	5.3	1.8	0	21.4	0	16.1	0	1.8	41.1	1.8	1.8	7.1	21.4	0	25.0	1.8	0	44.6	0	0	5.3	23.2	0	23.2	0	3.6
	Sa	26.8	16.1	16.1	5.3	10.7	1.8	8.9	14.2	0	23.2	5.3	5.3	12.5	16.1	7.1	16.1	10.7	3.6	25.0	14.2	7.1	7.1	19.6	7.1	1.8	12.5	5.3
	D	10.7	8.9	41.1	10.7	12.5	1.8	1.8	12.5	0	16.1	5.3	33.9	25.0	1.8	1.8	1.8	10.7	3.6	7.1	3.6	39.3	10.7	5.3	3.6	3.6	17.8	8.9
	A	16.1	16.1	16.1	16.1	7.1	7.1	7.1	14.2	0	12.5	8.9	16.1	17.8	10.7	5.3	8.9	19.6	0	12.5	14.2	25.0	17.8	5.3	3.6	5.3	14.2	3.6
	Su	8.9	14.2	1.8	19.6	35.7	3.6	8.9	7.1	0	30.3	5.3	3.6	10.7	28.6	5.3	8.9	1.8	5.3	17.8	12.5	7.1	5.3	25.0	3.6	7.1	17.8	3.6

(注)

1 単位: %

2 cog: 認知群 exp: 表出群

3 J: 喜び Sa: 悲しみ D: 嫌悪 A: 怒り Su: 驚き
F: 恐れ Sh: 恥 C: 軽蔑

強度：強度を表した6つの副詞は、次のように、点数化された。“わずかに”を1点とし、それ以降，“少し”“わりに”“かなり”“とても”“非常に”の順に2～6点を当てた。この得点データは、表出群被験者が表出した5個の感情別に整理され、5個の各感情、および感情全体について、表出群要因2（不安高・低）×認知群要因3（不安高・中・低）の2要因分散分析で処理された。ただし、無答があった嫌悪（1個）と悲しみ（2個）、したがって感情全体（3個）の3つの感情の次元においては、重みをかけない平均法が用いられた。検定の結果、喜びと悲しみにおいて、ともに表出群要因に有意差がみいだされた。喜び（表4）では、低不安表出群は高不安表出群より、表出の強度が強いと判断されることがわかった（ $F(1, 330)=14.03$ ； $P<0.001$ ）。悲しみ（表5）では、高不安表出群は低不安表出群より、表出の強度が強いと判断されることがわかった（ $F(1, 328)=23.25$ ； $P<0.001$ ）。その他の感情の次元については、有意差はみられなかった。

表4 感情「喜び」における強度

cog exp	H	M	L	全体
H	2.84 (1.22)	2.77 (1.36)	2.80 (1.52)	2.80
L	3.43 (1.50)	3.30 (1.66)	3.46 (1.36)	3.40
全体	3.13	3.04	3.13	3.10

（注）数値は平均値，（ ）内の数値は標準偏差

表5 感情「悲しみ」における強度

cog exp	H	M	L	全体
H	3.09 (1.39)	3.05 (1.55)	3.59 (1.41)	3.24
L	2.33 (1.16)	2.68 (1.23)	2.6 (1.17)	2.54
全体	2.71	2.87	3.10	2.89

（注）数値は平均値，（ ）内の数値は標準偏差

不成立の傾向：全回答からコミュニケーションが成立している回答を除いて、不成立の回答のみを集めた。さらに、“その他”の自由記述部分も除外された。これは、この部分の回答を含めると、感情の種類が多くなり過ぎるためである。こうして、不成立の回答は、認知群の認知評定で用いられた8個の感情に分類されて、分析がなされた。これは、表出群、認知群の各群について検討された。

まず、表出群について、特性不安による“表出傾向”を検討するために、認知群の不安別3群はこみにされた。不成立の全回答を8個の感情別に集計して、表出群の不安別にまとめたものが表6である。これを χ^2 検定したところ、高

表6 不安の影響による表出群の表出傾向の相違（感情全体）

	喜び	悲しみ	嫌悪	怒り	驚き	恐怖	恥	軽蔑	全体
H	134	109	60	64	42	43	118	38	608
L	116	54	57	67	87	29	81	87	578
計	250	163	117	131	129	72	199	125	1186
χ^2	n. s.	18.42**	n. s.	n. s.	20.27**	n. s.	6.17*	24.35**	63.79**

（注）数値は不成立の回答の度数

* $P<.05$ ** $P.01$

不安表出群と低不安表出群の表出傾向に有意差がみられた（ $\chi^2=63.79$, $df=7$; $P<0.01$ ）。そこで次に、どの感情として認知されやすいかを検討した。その結果、高不安表出群は低不安表出群より、悲しみ（ $\chi^2=18.42$, $df=1$; $P<0.01$ ）、恥（ $\chi^2=6.17$, $df=1$; $P<0.05$ ）と有意に多く認知されることがわかった。また、低不安表出群は高不安表出群より、驚き（ $\chi^2=20.27$, $df=1$; $P<0.01$ ）、軽蔑（ $\chi^2=24.35$, $df=1$; $P<0.01$ ）と有意に認知されることがわかった。他の4個

の感情については、有意差はみられなかった。さらに、表出群の表出した5個の感情別に表出傾向を分析した。その他の回答を除いた各感情における不成立回答（不成立となる感情の種類は7個になる）について、表出群の不安の影響を、 χ^2 検定によって検討した。各感情における不成立回答の7個の感情別の度数と χ^2 値を、表7～表11にまとめた。その結果、喜び（ $\chi^2=39.32, df=6: p<0.01$ ）、悲しみ（ $\chi^2=61.79, df=6: p<0.01$ ）、嫌悪（ $\chi^2=28.75, df=6: p<0.01$ ）、怒り（ $\chi^2=29.05, df=6: p<0.01$ ）、驚き（ $\chi^2=29.13, df=6: p<0.01$ ）の5個の感情すべてにおいて、高不安表出群と低不安表出群の表出傾向に有意差がみられた。

表7 喜び表出における表出傾向

	悲しみ	嫌悪	怒り	驚き	恐怖	恥	軽蔑	全体
H	19	7	14	10	3	25	6	84
L	4	2	7	37	0	36	1	87
計	23	9	21	47	3	61	7	171
χ^2	11.92 ^{**}	n. s.	n. s.	20.11 ^{**}	n. s.	n. s.	n. s.	39.32 ^{**}

表8 悲しみ表出における表出傾向

	喜び	嫌悪	怒り	驚き	恐怖	恥	軽蔑	全体
H	5	22	20	0	16	22	8	93
L	42	16	14	26	9	15	21	143
計	47	38	34	26	25	37	29	236
χ^2	20.34 ^{**}	n. s.	n. s.	19.00 ^{**}	n. s.	n. s.	n. s.	61.79 ^{**}

表9 嫌悪表出における表出傾向

	喜び	悲しみ	怒り	驚き	恐怖	恥	軽蔑	全体
H	28	39	21	21	8	26	15	158
L	19	10	26	11	4	4	23	97
計	47	49	47	32	12	30	38	255
χ^2	n. s.	8.00 ^{**}	n. s.	n. s.	n. s.	8.81 ^{**}	9.58 ^{**}	28.75 ^{**}

表10 怒り表出における表出傾向

	喜び	悲しみ	嫌悪	驚き	恐怖	恥	軽蔑	全体
H	31	21	26	11	13	35	5	142
L	23	22	32	13	9	12	27	138
計	54	43	58	24	22	47	32	280
χ^2	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	12.75 ^{**}	17.80 ^{**}	29.05 ^{**}

表11 驚き表出における表出傾向

	喜び	悲しみ	嫌悪	怒り	恐怖	恥	軽蔑	全体
H	70	30	5	9	3	10	4	131
L	32	18	7	20	7	14	15	113
計	102	48	12	29	10	24	19	244
χ^2	27.62 ^{**}	—	—	6.80 [*]	—	—	8.83 ^{**}	29.13 ^{**}

次に、認知群について、特性不安による“認知傾向”を検討するために、表出群の不安別2群をこみにし、その他の回答を除く不成立の全回答を8個の感情ごとに集計して、認知群の不安別にまとめたものが表12である。 χ^2 検定の結果、不安の影響による認知群の認知傾向につ

表12 不安の影響による認知群の認知傾向の相違（感情全体）

	喜び	悲しみ	嫌悪	怒り	驚き	恐怖	恥	軽蔑	全体
H	76	65	44	46	43	26	59	33	392
M	96	43	33	51	39	23	81	40	406
L	78	55	40	34	47	23	59	52	388
計	250	163	117	131	129	72	199	125	1186
χ^2	—	—	—	—	—	—	—	—	—

いて有意差はみられなかった（ $\chi^2=2.21$, $df=14$:n.s.）。さらに、表出群の場合と同様に、表出群の5個の表出感情別に認知傾向を分析した。その結果、喜び（ $\chi^2=7.39$, $df=12$:n.s.）、悲しみ（ $\chi^2=16.58$, $df=12$:n.s.）、嫌悪（ $\chi^2=9.02$, $df=12$:n.s.）、怒り（ $\chi^2=12.41$, $df=12$:n.s.）、驚き（ $\chi^2=21.12$, $df=12$:n.s.）で、いずれの感情においても有意差はみいだされなかった。

感情判断の理由：感情判断の手掛かりが、認知者の不安の高さによって異なる、と予想されたためにおこなわれたが、“表情”、“しぐさ”、“雰囲気”といった回答が多く、相違を明確にしえないため、この感情判断の理由についての研究は断念された。

SD法：尺度は1～7点と得点化された。この得点データも、表出群が表出した5個の感情と感情全体の6つの感情の次元で整理された。その6つの各次元において、15本の尺度毎に、表出群要因2（不安高・低）×認知群要因3（不安高・中・低）の2要因分散分析で処理された。多数の有意な結果が得られたが、紙数の関係で省略する。必要に応じ考察において触れる。

考 察

全体としては、感情の種類、強度のいずれについても、有意差はみられなかった。感情全体では、感情のコミュニケーションに対する不安の影響はみいだされなかったのである。仮説(1)、(2)、(4)は否定された。

仮説(1)と異なり、表出群に不安の影響がみられなかった一因は、感情の種類ごとに、不安の影響が異なり、特定の感情表出については不安がコミュニケーションに促進的に影響し、特定の感情表出では阻害的に影響するため、全体で相殺されたことにある。そこで、各感情のコミュニケーションの成立に対する表出群の影響について、さらに詳細に考察しておく。喜び表出は、

笑う表情によって容易に伝達されるため、不安の影響がみられなかったと考えられる。実際、本実験で、喜びの成立率は、47.0%（感情全体の成立率は27.1%）で、5個の感情のうち最も高かった。驚き表出については、有意水準を5%としたため削除したが、実際には表出群要因に $p < 0.1$ の傾向差があり、低不安表出群は高不安表出群より、正しく認知されやすい傾向がある。したがって、驚きでは、仮説の支持は示唆されている。怒り表出では、怒りと類似した因子負荷をもつ怒りと接近した感情とされる軽蔑（Davitz, J. R. 1969）をあわせ、認知3群をこみにして成立率を χ^2 検定すれば、有意に低不安表出群が、正しく認知されることがわかる（ $\chi^2 = 15.63$, $df = 1$; $p < 0.01$ ）。この怒り表出に軽蔑を加算した数値をもとにして、感情全体の成立率に対する表出群の不安の影響を、認知3群をこみにして χ^2 検定で検討すると、低不安表出群は有意に全体で正しく認知されることがわかる（感情全体の成立率は、高不安群が26.1%, 低不安群が31.9%, 両群全体29.0%となる。 $\chi^2 = 6.94$, $df = 1$; $p < 0.05$ ）。したがって、表出群についての仮説(1)はある程度支持された。

表出群についての検討課題(3)の表出傾向については、高不安者に、悲しみと恥の一般的表出傾向があることが確かめられた。この一般的表出傾向は、SD法とも対応する。高不安表出群と低不安表出群の平均点が異極方向へ分かれ、かつ、表出群要因に有意差がある尺度は5本であった。これらによれば、高不安表出群は、「落胆した」「不安気な」「自信のない」「迷っている」とイメージされている。工藤他（1984）は、これらの尺度が自己内の感情状態を反映する“自己充実性”を示すと解釈し、これに対応する姿勢として“うなだれる”“肩を落とす”“うつむく”が関係していることを確かめている。これらの姿勢は、すべて悲しみの表出として妥当であり、“うつむく”は、恥の表出としても妥当なものである。不安とこれらの姿勢の関係は、過去の研究ではみいだされていないが、これらの姿勢や身体動作が、高不安者の一般的表出傾向と関係することが予想される。また、実験1で、高不安者の特徴とされた非接触動作の下位項目のうち、有意差はみられなかったが、“胴を揺らす”項目の使用時間は、高不安者の方が長い。この動作は、モジモジした動作として恥の表出と認知されたとも考えられる。事実、高不安者のこの身体動作は、細かな揺れであった。しかし、実験1の考察でも述べたように、身体動作の項目が不十分であったことは、本研究の問題点であろう。

したがって、特性不安の感情表出への影響は、解消仮説や引きこもり仮説より、高不安者の表出傾向による影響が大きいと考えられる。その影響は、コミュニケーションの成立に対して、全体的には阻害的なものと考えられるが、促進的に作用する感情もあると考えられる。実験1の無意味な身体動作は、この表出傾向に、不安解消のため加わったものと考えられる。“腕をふる”動作は、実験1で述べたように、水平方向の小さな動きであり、コミュニケーションに対して阻害的影響を及ぼさなかったと考えられる。

認知群についての仮説(2)の否定は、解消仮説で仮定された特性不安による課題への集中困難という Sarason の説明を否定する。さらに、不安による認知の正確さへの影響がみられなかったことは、引きこもり仮説における高不安者の認知の正確さの増大も否定する。これは、Wine の主張を支持する。すなわち、本実験が、実際のコミュニケーション場面でなく、ビデオ画面による認知課題であるために、自我評価的課題、あるいは、自我脅威的課題ではなかったためであり、そのような課題状況であれば、異なる結果が予想される。

認知群の検討課題(3)については、特性不安による認知傾向はみられなかったが、SD法の結果から、不安による微妙な認知の差異を検討してみると、異極に分かれた有意差のある尺度は、認知群では4本あった。これによれば、「落胆した」「不安気な」な認知傾向が、高不安者と低不安者にみられ、中不安認知群を頂点とした逆U字型曲線で、中—高、および中—低の認知不

安群の間に有意差があり、中不安認知群のみ反対の極に属した。これに対して、「拒否的」な認知傾向は、低不安認知群を中央に、高不安・高不安・高不安の間に有意差があり、高不安認知群のみ「拒否的な」極に属した。これは、高不安者は他者の態度に拒否性を感じやすく、自己の感情状態の反映として、不安気な落胆したイメージを他者に認知しやすいと考えられる。

仮説(4)も否定されたが、高不安認知者は中不安認知者にくらべ、全体的には感情の強度を強く認知している。しかし、それは微小な差で、この結果は、強度の認知と特性不安に直接的な関係がないことを示していると考えられる。

次に、感情別に、考察する。

喜びにおいて、高不安表出群の強度は、低不安表出群より有意に弱いと認知される。SD法で、表出群には14本の尺度で有意差がみられたが、低不安表出群は、より「はしゃいだ」「張り切った」と認知され、強度の差を示している。14本の尺度のうち、異なる極に分かれた尺度が2本あり、それらでは、高不安表出群は「自信のない」「迷っている」とイメージされている。これらの尺度は、前述したように“自己充実性”を表すものと解釈されており、喜びと悲しみはその対極を構成する。それにしたがえば、強度の結果は、たんに引きこもり仮説によるものとは考えがたい。そこで、喜び表出における表出傾向を具体的に検討するため、どの感情と認知されやすいかを検討した結果、高不安表出群は、低不安表出群にくらべ、悲しみと有意に認知されたことがわかった ($\chi^2=11.92$, $df=1$; $p<0.01$)。これは、高不安者の一般的表出傾向と一致している。喜びと悲しみは正反対の感情であり、その非言語的表出も異なる。強度の差は、社会的損失を最小限にするための抑制というより、高不安者の自己充実性の不足を示す一般的表出傾向が、喜びの表出においても影響を及ぼしたためと考えられる。他方、低不安表出群は、有意に、驚きと認知されることがわかった ($\chi^2=20.11$, $df=1$; $p<0.01$)。低不安者が、喜び表出で、驚き表出と誤認された数(37個)は、低不安者が驚き表出と誤認された全数(87個)の42.5%を占める。Schlosbergの表情円環尺度(1941)において、喜びと驚きは隣接した感情であり、隣接した感情は誤認されやすいものとされている。驚きを選択した認知群被験者の感情判断の理由に、“口をあけていた”という回答がいくつかみられた。これは、驚きの表出としても強いものであろう。それが、強度の結果の一因と考えられる。

悲しみでは、高不安表出群は、低不安表出群にくらべ、悲しみ表出を有意に正しく認知されるとともに、その強度が強いと認知される。悲しみでは、不安は非言語的コミュニケーションを促進している。これは、高不安者の一般的表出傾向が悲しみ表出と類似しているためと考えられる。これは、実験1の考察に一致している。また、実験1で述べたように、高不安者の身体動作の頻度が、他の4個の感情より、少ないことが悲しみ表出における強度の結果に影響を及ぼしていると考えられる。この高不安者の表出傾向については、後にもう一度考察する。

嫌悪については、高不安表出群は、低不安群にくらべ、嫌悪の感情表出を正しく認知されにくい。実験1の発言量の結果から、嫌悪の表出について解消仮説が支持されていた。しかし、嫌悪表出における表出傾向を検討するため、 χ^2 検定したところ、高不安表出群の嫌悪表出は低不安表出群より、悲しみ ($\chi^2=8.00$, $df=1$; $p<0.01$)、恥 ($\chi^2=8.81$, $df=1$; $p<0.01$) と有意に認知され、低不安表出群は、軽蔑と有意に認知される ($\chi^2=9.58$, $df=1$; $p<0.01$)。嫌悪と軽蔑は、Schlosbergの表情円環尺度で隣接した表情表出である。したがって、低不安表出群の表出に対する誤認は予想されるものである。SD法の結果から、高不安表出群の嫌悪表出は、「親しみのある」イメージを与え、低不安表出群と異極にあり、その平均点の差は有意であった。さらに、高不安表出群は、より「好意的」な印象を与えている。しかし、高不安表出群の嫌悪表出は、低不安表出群にくらべ、それらと反対の印象を与えている。高不安表出群の嫌

悪表出は、発言による不安の解消を行いながらも、解消仮説による歪曲された表出ではなく、一般的表出傾向によってコミュニケーションの不成立が生じると考えられる。上述のように、表出傾向と不安解消のための身体動作は共存できると考えられる。

怒りでは、成立率、強度ともに不安の影響がみられなかった。怒りのコミュニケーションの全体の成立率は14.6%で、5個の感情のうち最も低い。そこで、怒り表出における表出傾向を、 χ^2 検定で検討したところ、高不安表出群は、低不安者表出群より有意に恥と認知され ($\chi^2=12.75$, $df=1$: $p<0.01$)、逆に、低不安表出群は、高不安表出群より軽蔑と有意に認知されることがわかった ($\chi^2=17.80$, $df=1$: $p<0.01$)。低不安表出群の怒り表出に対する認知は、嫌悪が19.0%、軽蔑が16.1%で、誤って認知された回答の1番目、2番目である。前述したように、軽蔑と怒りは、接近した感情であるとされている。また、嫌悪と怒りの表情表出は、前述の表情円環尺度で隣接した表情表出とされている。したがって、低不安表出群における不成立は予想されるものである。これに対し、高不安表出群の怒りに対する認知は、恥が20.8%で誤って認知された回答のうち最も高い。恥は、怒りの表出としては適合的とはいえず、これは、高不安表出群の一般的表出傾向によるものと考えられる。実験1において、高不安表出群の怒りの表出は、身体への接触動作の頻度が多い傾向が確かめられた。これらの動作には、両手をあわせて腕をひねりながら伸ばす動作や両手をしきりに擦り合わせるといった動作がみられ、これらが恥と認知される理由であったと考えられる。しかし、強度については、怒りにおいて、高不安表出群の方が弱いと認知されている。このことから、無意味な身体動作が、感情の強度を強く認知させる要素にはならないことが推測される。

驚きでは、成立率、強度いずれにも有意差がみられなかった。しかし前述したように、低不安表出群が正しく認知される傾向がある。高不安表出群の驚き表出に対して、喜びが41.7%で最も多く誤って認知されている。また、驚きでは、高不安表出群は、低不安表出群にくらべ、喜びと有意に認知され ($\chi^2=27.62$, $df=1$: $p<0.01$)、逆に、低不安者は怒り ($\chi^2=6.79$, $df=1$: $p<0.05$)・軽蔑 ($\chi^2=8.83$, $df=1$: $p<0.01$) と有意に認知されることがわかった。また、SD法でも、表出群に5つの尺度で有意差がみられ、高不安表出群は「親しみのある」「感心した」「ほのぼのした」といった肯定的で、ゆったりしたイメージを与えている。低不安表出群は「いまましい」「あきれた」といった否定的イメージを与えている。驚きは、他の感情との複合で生じることが多い。驚き表出は、複合する感情の影響を受けるというEkman (1972) の説明にしたがえば、高不安者の驚きの体験談が、うれしい驚きであったこと、そして、低不安表出者は、緊張感のある否定的な意味あいの驚きであったと考えられる。コミュニケーションの不成立の回答中、喜びという回答が最も多かったが、それは、驚きの表出で40.8% (高不安表出群: 52.2%・低不安表出群: 27.6%) 生じている。認知群の回答に喜びが多く選択されたことは、喜び表出が、驚き表出における複合表出であったことに、その一因があると考えられる。

各感情別に考察してきたが、低不安表出群の一般的表出傾向である軽蔑や驚きは、誤認される予想が可能なところで認知されていることがわかる。それに対して、高不安表出群は、殆どの感情表出状況で、不適合な一般的表出傾向で反応しており、その結果、悲しみの感情には促進的に影響したが、全体として感情の表出が阻害されることが示唆された。すなわち、本研究では、特性不安のコミュニケーションへの影響は、表出傾向によるコミュニケーションへの影響が最も強いと考えられる。

一般的表出傾向は、高不安者の防衛反応であると考えられる。高不安者にとって、感情表出状況は自我脅威の状況であり、この状況への反応として、一般的表出傾向に示されるような身体動作や姿勢が喚起されると考えられるが、これには、さらに検討が必要である。

また、高不安表出者の表出傾向の特徴についても今後の課題となる。上述した、工藤他の“うつむき”“うなだれている”という姿勢と不安の関係については明らかにされていないが、不安と悲しみと恥に共通する表出として、凝視回避が考えられる。Waxer (1974) は、高不安者の一瞥時間が低不安者より有意に短いことを確かめている。悲しみと凝視回避の関係は、はっきりと確認されている (Exline, R. V. 1968; Fromme, D. K. & Schmidt, C. K. 1972他)。恥について、Izard, C. E. (1977) は、凝視回避を主張している。工藤他が示している姿勢は、凝視回避をとまなうものである。うつむき加減な姿勢や身体を硬くして目を伏せる姿勢は、相手の反応の確認を阻害するが、自己表出が強制される状況では、相手の否定的反応を回避し、不安を軽減する方法であると考えられる。したがって、不安が凝視回避を可能にする身体動作や姿勢を喚起し、それが、悲しみや恥の感情の表現として認知されるとも考えられる。

本研究の結果から、感情の非言語的コミュニケーションについて、表出者要因の影響が大きいことが理解できる。特に、表出者の示す非言語的表出行動の特徴が、コミュニケーションに影響を及ぼすことがわかった。しかし、本研究では、明示されなかった認知者要因の影響があることは、予想するに難くない。

要 約

本研究は、表情と身体動作による感情の非言語的コミュニケーションに対する特性不安の影響を検討した。感情の次元については、喜び・悲しみ・嫌悪・怒り・驚きの5つが使用された。特性不安はMASで測定した。特性不安の影響は、表出者と認知者のそれぞれについて検討された。表出者は高・低の2群、認知者は高・中・低の3群に分けられた。

実験1では、不安高・低8名ずつ計16名が被験者となり、表出者の特性不安が、非言語的表出行動に及ぼす影響が検討された。

実験1における主要な結果は次の通りである。

1. 高不安者は、低不安者より、無意味な非接触動作の使用時間が長い。特に、腕をふる動作の使用時間が長い。
2. 高不安者は、悲しみ表出において、低不安者より、無意味な身体動作の頻度、身体動作全体の頻度が少ないが、無意味な身体動作の使用時間は長い。
3. 高不安者は、怒り表出において、低不安者より、有意な身体動作の頻度が少なく、無意味な身体動作の使用時間が長い。特に、無意味な身体接触動作の使用時間が長い。
4. 高不安者は、低不安者より、嫌悪の体験談を長く話す。

実験2では、実験1の表出者から、高・低両群から4名ずつ計8名を表出群として構成した。さらに、認知群として、不安高・中・低の3群各14名ずつ計42名を構成した。これら、表出群と認知群によってなされる感情の非言語的コミュニケーションについて検討した。

実験2における主要な結果は次の通りである。

1. 高不安表出者は、低不安表出者に比べ、喜び表出の強度を弱く認知される。
2. 高不安表出者は、低不安表出者に比べ、悲しみ表出において、正しく認知され、その強度を強く認知される。
3. 低不安表出者は、高不安表出者に比べ、嫌悪表出を正しく認知される。
4. 高不安表出者は、低不安表出者に比べ、その表出を、悲しみや恥と認知される。
5. 低不安表出者は、高不安表出者に比べ、その表出を、驚きや軽蔑と認知される。

以上の結果をもとに、引きこもり仮説、解消仮説、および表出傾向・認知傾向仮説と呼ばれ

る非言語的コミュニケーションの妨害を説明する3つの仮説の検討を行った。実験1では主に引きこもり仮説と解消仮説を検討した。その結果、感情のタイプによる差異が見られたが、解消仮説を支持する知見が多く得られた。実験2では、主に表出傾向・認知傾向仮説の検討を行い、とくに高不安者の表出傾向の影響がコミュニケーションの成立に大きな影響を与えていることが分かった。

引用文献

- Argyl, M. 1972 Bodily Communication. Cambridge University Press.
- Boice, R. & Monti, P. 1982 Specification of nonverbal behavior for clinical assessment. *Journal of Nonverbal Behavior*, 7, 79-95
- Bull, P. 高橋超訳編 1982 しぐさの心理学 北大路書房
- Cameron, N. 1947 *The Psychology of Behavior Disorders: A biosocial interpretation*. Boston: Houghton & Mifflin.
- Cunningham, M.R. 1977 Personality and structure of the nonverbal communication of emotion. *Journal of Personality*, 45, 564-584.
- Deutsch, F. 1952 Analytic posturology. *Psychoanalytic Quarterly*, 21, 196-214.
- Ekman, P. 1965 Differential communication of affect by head and body cues. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 726-735.
- Ekman, P. & Friesen, W.V. 1972 Hand movement. *Journal of Communication*, 22, 353-374.
- Ekman, P. & Friesen, W.V. 1982 *Emotion in the human face*. Cambridge University Press.
- Exline, R.V., Gottheil, I., Parades, A. & Winkelmeier, D. 1968 Gaze direction as a interview content and sex of respondent. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 201-209.
- Freedman, N. & Hoffman, S.P. 1967 Kinitic behavior in altered clinical states. *Perceptual and Motor Skills*, 24, 527-539
- Friedman, H.S. 1979 The interactive effects of facial expressions of emotion and verbal messages on perceptions of affective meaning. *Journal of Experimental Social Psychology*, 15, 453-469.
- Fromme, D.K. & Schmidt, C.K. 1972 Affective role enactment and expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 24, 413-419.
- Gard, K.A., Gard, G.C., Dossett, D. & Turone, R. 1982 Accuracy in nonverbal communication as affected by trait anxiety and state anxiety. *Perceptual and Motor Skills*, 55, 747-753.
- Izard, C.E. 1977 *Human Emotions*. New York: Plenum Press.
- 工藤力・西川正行 1984 姿勢の意味次元構造の検討 心理学研究, 55, 36-42.
- Leary, M.R. 1985 Self-presentational functions of socially anxious behavior. Symposium presented at the meeting of the American Psychological Association, Los Angeles.
- Leary, M.R., Knight, P.D. & Johnson, K.A. 1986 Social anxiety and dyadic conversation: A verbal response and analysis. *Journal of Social and Clinical Psychology*.

- Mahl, G. F. 1968 Gestures and body movements in interviews. *Research in Psychotherapy*, 3, 295-346
- 益谷真・莊巖舜哉 1989 手の動きに含まれる情動情報の検討 *心理学研究*, 60, 141-147.
- Morris, D. 1977 *Manwatching: A field guide in human behavior*. New York: Abrams.
- Murray, D. C. 1971 Talk, Silence, and anxiety. *Psychological Bulletin*, 75, 244-260.
- 中村明 1979 *感情表現辞典* 六興出版
- Plutchik, R. 1967 The affective differential: Emotion profiles implied by diagnostic concepts. *Psychological Reports*, 20, 19-25
- Pope, B. & Siefman, A. W. 1965 Interviewer specificity and topical focus in relation to interview productivity. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 4, 188-192.
- Rosenfeld, H. M. 1966 Instrumental affective functions of facial and gestural expressions. *Journal of personality and Social psychology*, 4, 65-72.
- Ruggieri, V., Celli, C. & Crescenzi, A. 1982 Self-contact and gesturing in different stimulus situation. *Perceptual and Motor Skills*, 54, 1003-1010.
- Sarason, I. 1960 Emotional findings and theoretical problems in the use of anxiety scales. *Psychological Bulletin*, 57, 403-415.
- Saunders, J. R. Jr. 1974 Effects of trait anxiety on noncontact verbal behavior in a standardized interview. *Journal of Clinical Psychology*, 30, 137-142.
- Schiftenbauer, A. 1974 Effect of emotional state on judgements of the emotional state of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 31-35.
- Schlosberg, H. 1952 The description of facial expressions in terms of two dimensions. *Journal of Experimental Psychology*, 44, 229-237.
- 莊巖舜哉 1975 人格要因が音声表出による情報伝達に及ぼす効果 *心理学研究*, 46, 247-253.
- Toner, H. L. & Gates, G. R. 1985 Emotional traits and recognition of facial expression of emotion. *Journal of Nonverbal Behavior*, 9, 48-66.
- Waxer, P. H. 1974 Nonverbal cues for depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 319-322.
- Waxer, P. H. 1977 Nonverbal cues for anxiety: An examination of emotional leakage. *Journal of Abnormal Psychology*, 86, 306-314.
- Wine, J. 1971 Test anxiety and direction of attention. *Psychological Bulletin*, 76, 92-104.